



本学経済学部OB(大28)原田哲史・関西学院大学経済学部教授の『19世紀前半のドイツ経済思想—ドイツ古典派、ロマン主義、フリードリヒ・リスト』(ミネルヴァ書房、2020年)が、第6回進化経済学会学会賞を受賞

原田哲史教授の手になる『19世紀前半のドイツ経済思想—ドイツ古典派、ロマン主義、フリードリヒ・リスト』(ミネルヴァ書房、2020年)が、第6回進化経済学会学会賞を受賞した。この受賞は大いに納得・感服できるものである。本書において、筆者は気の遠くなるような量の独語文献——巻末の文献一覧は約40頁に及び、正確には独・日のほか英・仏語のものも含まれる——を博搜し、副題にある3つの思想(や初期社会主義など)が交錯する当時のドイツ経済思想の布置を、立体的に浮かび上がらせることに成功している。

本書で精査されている数多くの先行研究のなかでもとくに注目に値するのは、草創期の本学経済学部を国内有数の研究機関に育て上げた(参照、拙稿「福島学派の遠雷——草創期福島大学経済学部の教官群像と井上紫電の軌跡」『行政社会論集』33巻4号、2021年(<http://hdl.handle.net/10270/5328>))小林昇のリスト研究であろう。この戦後経済学史の泰斗による、保護貿易の産業主義者リストに拡張主義的側面があったとする研究は、今日さらに継承されていくためには、リストからナチズムに至る脈絡の行き過ぎた指摘と、同時代の経済思想との比較の欠如という、二側面について修正・克服される必要がある、と本書は説く。小林のリ

スト論を風化させずに研究を深化させ、グローバル化の時代において生かしていこうとする著者がそのための新しい見地を示した、と言えよう。

周知のように、小林は、生涯耕し続けた3つの主な研究領域(リスト、スミス、重商主義)を、「デルタ」と呼称していた。そのうちイギリスを舞台とする後二者については、スミス『国富論』を基準にその他の理論を裁断・評価する絶対化を退け、スチュアートやタッカーを論じることでスミスを徹底的に相対化しようとした。小林の薫陶を受けた菊池壯藏・本学名誉教授の卓抜な比喻を借りれば、富士山の如き単独峰としてスミス単体を祭り上げるのではなく、吾妻山や安達太良山の如き連峰の最高峰として、スミスを再定位したのである。

しかし、大陸に目を転じると、「小林の研究はほとんどもっぱらリストを明らかにすること絞られ」たことで、「当時のドイツの様々な経済思想のそれぞれが——たとえリストほど大物ではなかったとしても——それなりの意義を有しつつ並存していたという事実」(269頁)は看過されてしまった、と筆者は見る。我が国の研究史への苛立ちに近い切迫した問題意識は、「過去の思想を直接・無媒介的に現代に関連づけることは慎まねばならぬ」(『アダム・ミュラー研究』(ミネルヴァ書房、2002年)270頁)と述べていたはずの筆者をして、(留保の上ではあるが)積極的に時評を語らせると同時に、ドイツでスミスと対質した三種の思想潮流の交錯の総

合的な解明へと向かわせることになった。その結果、「本書はリストと小林昇のリスト論とを正しく評価しつつ相対化し得たのである」(進化経済学会HP)。

評者の恩師の一人である、故・西村稔教授は、その師であり、昨年10月に長逝された上山安敏教授との関係を念頭に置きながら、「弟子が師の掌の上を出ないことほど不幸なことはない」と口にされていた(拙編『Aún aprendoそれでもまだ学ぶぞ 西村稔先生追悼集』2020年(<http://hdl.handle.net/10270/5154>)6頁)。晩年の小林に親炙した筆者も、小林に敬意を表すればこそ、上述の仕方で、いわば〈小林を以って小林を射った〉ように見える。学恩に報いる最高の流儀であろうし、小林のリスト研究が適切な批判的継承者に恵まれたことは、わが国の社会科学にとっても幸福なことであった。

先に触れた上山教授の『憲法社会史』(日本評論社、1977年)は、ワイマール議会制の崩壊を見据えながら、19世紀ドイツのリベラリストがイギリス憲法学を「希望形相」を通じて「歪曲」してドイツの政治的土壌に移植する様を、体系書から時事パンフレットに至るまで渉猟し、スリリングに活写した現代の古典である。この名著に匹敵するスケールの労作を本学経済学部OBのドイツ経済思想史の冒険者が江湖に問うたことを、心から喜びたい。

阪本 尚文

(本学行政政策学類准教授・憲法史)